ラムジ筆 Critical Notice (1923)

——ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』最初の書評——

細井雄介

Ramsey's Critical Notice (1923)

The present article is a translation of Ramsey's book review on *Tractatus Logico-Philosophicus:* It is also well-known as the first criticism of the said work.

The discussions, beginning with the decisive rebuttal of Russell's Introduction, are in each part very sharp and penetrating, but as a whole extremely complicated and difficult for an immediate grasp of their essence. Therefore, I have translated the whole text into Japanese, attempting to analyse clearly the subtle structure of this criticism.

The original text is as follows—

Frank Plumpton Ramsey, Critical Notice (1923) in: The Foundations of Mathematics, 1931. Appendix pp. 270–286.

(critical notice on *Tractatus Logico-Philosophicus,* by Ludwig Wittgenstein, with an Introduction by Bertrand Russell. International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method, 1922.)

本稿の目的は後段に置く一書評の翻訳紹介にある。原典は下記の通りである——CRITICAL NOTICE (1923) in: Frank Plumpton Ramsey, The Foundations of Mathematics. Routledge & Kegan Paul 1931 (4th impression 1965). Appendix pp. 270-286.

一昨秋創立五十周年を祝った本学が更なる道を行くにあたり、哲学科は昨平成十一年（一九九九年）四月に大学院を発足させ、修士課程初年度生八名を迎えて、創設の新たな活気を重ねることができた。早速の芸術学演習では Michael Podro, The Critical Historians of Art (1982) 読解を課題として、全二十二回の教室内討議で、不十分なりとも全篇の大観と意義の把握とは果せたと考えている。このポドゥロの書は、一八二七年から一九二七年の百年にわたる批判的美術史家の再検討を旨としている。そのさい、現時点・現在地に立つ者が過去芸術・異国芸術を理解できるとする根拠はどこにあるかの問題をめぐり、この難問と深刻に苦闘した一連の美術史家をポドゥロは批判的美術史家と呼ぶのであり、したがって本書は、今日では皮相な常識にまでなっている文化相対主義の秘奥に迫り、深い反省を強いる好著でもある。それでは当の反省によって著者自身はどこへ向うのか。批判的美術史家の提起した根本問題とは、ひとつ現在が過去芸術を取戻せる立脚点、ひとつ芸術と精神の自由との関係の二つとされていたが、まず前者について道を探ったすえ、最後の自由の問題にいたってポドゥロが頼るのはヴィトゲンシュタインの考想となっている。芸術の自由とは、芸術の生れた文化圏から芸術自体を切離せることにも関り、すなわち異国芸術理解の可能性にも関る事柄である。ところで言語を生の一形式とするヴィトゲンシュタインの見方によれば、言語は発生源の脈絡には還元しえぬものである。言語はわれわれの社会的交渉の内部で生じつつ当の交渉を変形させてゆくし、言語の内容

は世界内の事態でなく、語る生がすでに滲みわたった事態であるとされる。このヴィトゲンシュタインの見方に従うことによって今日の芸術理解は大きく変ってきている、とボドゥロは捉えており、言語との類推によって、芸術もわれわれの諸他の活動の脈絡から生じつつ、しかも諸他の活動には還元不能にして、諸他の活動を変形させてゆくものと考えているのである。こうしてわれわれは、哲学科の新風とともに、ヴィトゲンシュタイン再考を迫られる次第となった。

ヴィトゲンシュタインの思想については、生形式を力説して言語の使用一般の分析を周到に繰返す後期と、要素命題の処理を以て燦然と躍り出た前期との峻別如何をめぐって、論議が喧しいようである。だがいずれにせよ、処女作『論理哲学論考』の精読はヴィトゲンシュタイン理解の絶対の要件であろう。幸い、参画している古典読書会はこの『論考』を取上げ平成六年（一九九四年）九月三十日に始めて同十年（一九九八年）六月二十四日、ラッセルの序文も附せられた初版本全文を読了した。邦訳書に四書あるが、すでに最も若いものでも公刊後二十五年を経ており、およそ古典なるものは、時代の推移のなかで然るべき時機を得ては新たな解釈を施し、これを伝統の上に積重ねてゆくことを求めている、との信念から、新たな訳文を築いてのことであった。

右の読書会を主導するのは高校以来の畏友中平浩司である。昭和三十三年（一九五八年）三月卒業の東京教育大学において、いちはやくヴィトゲンシュタインを卒業論文の主題として以来、思索の主軸としてヴィトゲンシュタインの考察を深めてきた哲学者である。私が不意の病で入院の一昨秋から中断していた読書会が昨春四月に再開、新たに『論考』の索引の作成に入ろうとしたさい、中平は本稿のラムジ筆書評の検討をも提案した。

右に触れたように『論理哲学論考』はラッセルの序文を附して公刊された。著者が無名の若者であったからには、すでに高名な人物の、この序文があればこそ公刊も捗ったかと推察されるものの、著者ヴィトゲンシュタインはラッ

セルの序文に大きな不満を覚えたとされている。それではいかなる点に不満が生じたのか。後代の論者はあれこれの示唆を与えてくれるが、広汎な予備知識のない読書会員にとって、ラッセルの序文はまずは卓れた紹介と映ったのが実情であった。ところが、こうして公刊されるや翌年ただちに、もうひとりの俊敏な若者が、あたかも著者の不満を代弁するかのように、真先にラッセルの序文を叩くことから始めるのである。論争内容の密度のゆえにここに要説としてでなく、全文の翻訳として紹介する書評は、思想格闘の迫力を如実に教える一場の劇であろう。終始貫かれるのは、まずヴィトゲンシュタインの思想の体系的全体性を完璧なものと想定、選んだ論点にみられる不足は必ずや他所にこれを埋めるものありと博捜して、そのつど相手の思想の大きさや深さを最大限に確めてゆくという根本姿勢であり、欠陥や弱点の揚足取りには決して留まらぬ批評の、最も豊かな一例となっている。

思想解明の新たな武器としてアメリカの哲学者パースの用いた対語、タイプ＝トークンの考想を導入してからの論題は四つ、本訳では第一は四三頁に始まる「真理」の問題、第二は四九頁に始まる「神秘的なるもの」の問題、第三は五五頁に始まる「哲学の説明」の問題、第四は五八頁に始まる「世界」の問題である、とわれわれは分類、それぞれの区分が不鮮明とならないように、細心の注意を払ったつもりである。『論理哲学論考』を結ぶ最終節「語ることのできないもの、これについては黙さなければならぬ」は独歩するまでに有名な一行となっているが、この後に残る余韻を、ラムジの右に述べた第四段は誰よりも深く捉えているように思われる。ケムブリッジの宗教的風土に育った思想家が、異国ウィーンの風土に育った思想家の魂に、みごとに共鳴した証跡でもあろうか。ともかく、このような感銘を覚えつつ、中平の提案に応えた細井が昨平成十一年夏の休暇時に書評全文の下訳をつくり、秋十月から本年二月までの読書会は、この下訳の逐語的検討に精力を集注した。常時討議に参席して撓みなく推敲を施したのは他に會川義寛、岩田登久次、高橋駿一の三者である。したがってここに掲載する翻訳は五名共同の作業成果であることを明

記しておく。

ラムジ（Frank Plumpton Ramsey, 1903-1930）は生歿年記にみる通り、二十代後半の若さで夭折（黄疸治療手術の失敗によるとされる）している。しかし知友ケインズの確率論の粉砕、福祉政策基礎論への寄与など、功績はきわめて大きいとされる人物であり、やがては魅力に富む伝記の出現も期待できようし、ここでは軽率な人物紹介を行うべきであるまい。幸いにも近年、邦書『ラムジー哲学論文集』（メラー編　伊藤邦武・橋本康二訳　勁草書房　一九九六年）が公刊されており、ここで明敏な思想の一端をよく知ることができ、末尾に多大な業績を示唆する簡潔な紹介も添えられていることを、訳者に捧げる敬意を籠めて伝えるに留める。

書評（一九二三年）

Tractatus Logico-Philosophicus, by Ludwig Wittgenstein, with an Introduction by Bertrand Russell. (International Library of Psychology, Philosophy and Scientific Method) 1922.

フランク・プランプトン・ラムジ

本書は、広範な論題にわたる独創的な思想を含み、理路整然とした体系を成しており、著者の主張のごとく、扱われた諸問題の要点の究極的解決であるかどうかに関りなく、並外れて重要であり、あらゆる哲学者の注目に値する。しかも、当の体系が帰するところ全く根拠薄弱であるにしても、本書には深刻な傍論（obiter dicta）および諸他学説への批判が数多く含まれている。しかし、見開き頁に独・英対訳の印刷ではあるが、たいへん理解しがたい。ヴィトゲンシュタイン氏が書いているのは連続の散文でなく、短い命題群であり、各命題には、主題提示にさいしての強調を示すために番号が附されている。これは本書に警句風の魅力を与えており、文章はそれぞれ別々の考察を受けたに違いないゆえに、恐らく本書を細部にいたるまで一段と正確なものとさせているであろう――しかしこのことが、登場する学術的用語や理論の多くに適切な説明をみずから加える妨げとなっているように思われる。こうなるのは恐らく、説明とは正確さをやや犠牲とするものだからであろう。

この不足という欠陥の一部はラッセル氏の序文によって仕上げられている――だが氏はヴィトゲンシュタイン氏の意図へ導く無謬の案内者ではないのかもしれない。「ヴィトゲンシュタイン氏の書を理解するためには、氏の関心を

寄せる問題は何かを了知する必要がある。氏の理論の記号運用（シンボリズム）を扱う部分で氏が関心を寄せているのは、論理的に完璧な言語が充たすべき条件のことである」とラッセル氏は述べているが、これはきわめて疑わしい一般化であると思われる。確かにヴィトゲンシュタイン氏には、例えば三・三二五以下の「論理的統辞論」のごとく、いかなる言語でもない論理的に完璧な言語への関心を明示する文章があるものの、しかし総じてヴィトゲンシュタイン氏は、一見反対に見えようとも自分の理論は日常の言語に当てはまる、と主張しているように思われるからである（ことに四・〇〇二以下を参照のこと）。明かにここが重要な点である。というのも、このように理論を広く適用させてはじめて興味は増大するからであり、また、ラッセル氏は「何らかの文が何らかの事実を主張しているはずとするためには、どのように当の言語が構築されていようと、文の構造と事実の構造とのあいだに何か共通のものがなければならない」と語って、恐らくこれがヴィトゲンシュタイン氏の理論における最も根本的な提題としたが、このように想定された提題なるものの尤もらしさを減殺するからである。

この教説は「図像（picture）」とこれの「写像形式（form of representation）」という難解な観念に依拠すると思われるので、両観念の説明と批判に努めてみたい。

図像はひとつの事実（fact）である。すなわち図像の要素は一定の仕方で相互に結ばれているという事実である。これら要素は何らかの対象（図像すなわち事実の図像、となる当の事実の成分）に対応（co-ordinate）している。これらの対応が図像を図像たらしむる写像関係を構成する。写像をつくるというこの関係は「図像に属している」（二・一五一三）。これは私の思うに、われわれが図像について語るときにはいつでも、図像が図像となるよすがとして何らかの写像関係を心に思描いている、ということである。このような事情のもとでわれわれは、図像の要素が相互に結ばれているのと同様に対象が相互に結ばれていることを図像は表している（represent）と語るのであり、これが当の図像

の意味 (sense) である。そしてこれを「表す (represent)」および「意味 (sense)」の定義として受取らなければならない、と私は思う。言いかえると、何らかの対象が何らかの仕方で結ばれていることを図像は表していると語るとき、われわれの指しているのはただ、図像の要素は当の仕方で結ばれていて、図像に属する写像関係によって当の対象に対応している、というだけのことである。(これが定義であることは五・五四二からの当然の帰結であると私は思う。)

「写像形式」に光を投じてくれるのは、本書の早い箇所で事実の構造および形式を語った下記の言葉であろう。「事態 (atomic fact) 内で対象の連関し合う仕方が、事態の構造である。形式とは構造の可能性 (possibility) のことである。事実の構造は事態の構造から成る」(二・〇三二、二・〇三三、二・〇三四)。ただひとつ構造と形式の違いを見分けることのできる点は、当の形式を考察中と言われる事実が事実ならぬ場合をも、「可能性 (possibility)」を入れるならば、形式については含めてよい、という点であり、こうして aRb なる事実の形式については、aRb の真偽に関りなく、この形式が論理的に可能であれば語れることになる。二つの事実が同じ構造もしくは同じ形式をもつことはできるのかどうか、これが右の定義では明かにならないのは残念である。二つの事態は、いずれにおいても対象は同じ仕方で連関し合うのであるから、同じ構造をもつとしてよいかに見える。ところが本書後方の言葉によると、事実の構造とは、たんに対象の相互に連関し合う仕方であるばかりか、対象がいかなる対象であるかに依存するものでもあり、それゆえ相異なる二つの事実は決して同じ構造をもつことがない、と見えるのである。

図像はひとつの事実であり、あるがままで構造および形式をもつ。しかしながら二・一五と二・一五一においてわれわれには、図像の「構造」および「写像形式」の新たな下記の定義が与えられる。「図像の要素が一定の仕方で相互に関り合うということは、事象が同じ仕方で相互に関り合っていることを表している。図像の要素のこのような連関が図像の構造であるとし、この構造の可能性が図像のもつ写像形式であるとしてよかろう。写像の形式とは、図像

の要素と同様に事物が相互に関り合うという可能性のことである」。この文章は人をまごつかせる。第一に、ここには写像形式について相異なる二つの定義があるからであり、第二に、これら二つの最初の定義に見られる「このような連関」をいかに解釈すべきか明白でないからである。すなわち「このような連関」とは、要素の関り合っている一定の仕方を指すようでもあり、あるいは先行文の全体を指して、「要素のこのような連関」とは、要素相互の関り合いが事象相互の同様の関り合いを表していることかもしれないからである。いずれの解釈においても第一の定義が第二の定義と合致することはないと思われる。「写像形式」のこれらどちらとも言える意義を決めるには、この形式についてヴィトゲンシュタイン氏の語っている事柄を考察することに期待するしかない。この形式を氏の理論において根本的に重要なものとさせているのは、二・一七で断言されている主たる性質――「現実を図像の仕方で、正しくであれ誤ってであれ、写像化できるために、図像が現実と共有しなければならないものとは図像のもつ写像形式である」であり、さらには以下の性質である。「およそ現実を、正しくにせよ誤ってにせよ、写像化できるために、図像の形式はいかなる形式であっても、図像それぞれが現実と共有しなければならないものとは、論理的形式すなわち現実のもつ形式である。写像の形式が論理的形式であるとき、図像は論理的図像と言える。図像それぞれはまた論理的図像でもある。(このことに比べると例えば、図像それぞれは必ずしも空間的図像ではない。)」(二・一八、二・一八一、二・一八二)。とすれば、図像は幾つかの写像形式をもってもよいが、なかの一つはまさしく論理的形式でなければならないことになり、また、図像はこれの描くものがもつのと同じ論理的形式をもたなければならぬとは断言されていないが、あらゆる図像はまさしく論理的形式をもたなければならぬとは断言されていることになる、と思われる。またこれは、写像の論理的形式は表すことができないとする推断を、さらに実(まこと)しやかに見せる。実しやかにというのは、論理的形式が一箇の図像および現実に共通であったからとて、このことは、当の論理的形式を別の図像に

表すことはできないと想定するのがよいとする、何らかの根拠をまでも与えることはできないであろうからである。

さて、図像が空間形式はもってよいし論理的形式はもたなければならぬことの意味は、論理的形式を図像の要素が相互に関り合う仕方（の可能性）のことと見做すならば、解りやすい。（さきの第一の定義の一解釈である）。これは、地図内区画の色彩が対応する地方区画の海抜高度を表すばあいのごとく、論理的であるとしてよかろう——図像の要素は主語－述語として関り合い、このことが、対応する事象も主語－述語として関り合っていることを表すのである。他方、形式は、二点間にある一点が二都市間にある一都市を表すばあいのごとく、空間的であるとしてよかろう——だがこの事例でわれわれは、「間にある」を諸点の関り合う仕方とみるのでなく、図像内でおのれ自体としか対応しない別箇の要素とみることもできる。とすれば、「間にある」と諸点とは関り合ってはいても空間的にでなく、三者関係とこれの相関者として、ということは論理的に関り合うのであるから、当の形式は論理的である。こうして空間的かもしれないが論理的でなければならぬ何かがあることになる。だからといって、この何かが写像形式であることにはならない。写像形式は右のことを含む何かさらに複雑な実体ゆえに、派生的に空間的とか論理的なのであろうからである。上述のところがいかにも写像形式なるもののことであるとすれば、図像は論理的形式をもたなければならぬ、と語ってヴィトゲンシュタイン氏の言おうとしたのは、図像は事実でなければならぬ、というだけのことであろう。また、写像の論理的形式については表すこと、話すことができぬ、と語って同じく言おうとしたのは、事実について語ると見える陳述はことごとく実際には事実の成分について語っているのであるから、事実を事実たらしむるものについては語ることができず、事実についてもついに全く語ることができぬ、というだけのことであろう。これらのことを確かに氏は信じている。しかし私には、写像形式を語る氏の入組んだ諸命題がこれ以上に出ない、とはありそうにないことと思われるのである。恐らく氏は混乱しており、用語の使用に一貫性がない。そこで上記第二の定義

「写像の形式とは、図像の要素と同様に事物が相互に関り合うという可能性のことである」に立戻ると、図像は図像化されるものと写像形式を共有するという別の意味、言いかえれば、写像関係によって図像の要素に対応する事物は、図像の要素と同様の仕方で相互に関り合うことが可能という意味を見出せるとしてよかろう。こうして到達するところは重要な原理「図像は、これが呈示する事況の可能性を含有する」(二一・二〇三)である。後ほど述べる理由から私には、この原理をこれだけ独立に認容するのであれば、何か図像と世界とに共通のものながらこれ自体を表すことはできぬものの必然性からヴィトゲンシュタイン氏の導く非＝神秘的な推論帰結は、ほとんどすべて正しいとしてよいと思われるし、またそれゆえ、これらの推論帰結には、この摑まえどころのない実体、本来的に論議不可能という写像形式なる実体の本性が提供する基盤と比べて、これより確かな基盤を提供することができると思われる。

文の主張する事実と文とが共有しなければならぬ、とヴィトゲンシュタイン氏の考えるものの会得、いやそれどころか本書を成す大部分の会得を少しでも進めるためには、氏の「命題(proposition)」なる語の用い方を理解する必要がある。私の思うに、この理解はパース(Charles Sanders Peirce, 1839-1919)の用いる二語を導入すれば容易になる。この頁に the は十二あるという意味での語をパースはトークン(token 生起形)と呼ぶ。これら十二のトークンはすべて語 the なるタイプ(type)の事例(instance)である。このタイプ＝トークンの両義性をもつ語は本来の「語」以外にもある。例えば一箇の感覚とか思考とか情動とか観念などはタイプであるかトークンであるかのいずれかとしてよい。そしてヴィトゲンシュタイン氏の用法では、例えば『数学原理(Principia Mathematica)』におけるラッセル氏の用法とは正反対に、「命題」の語もまたタイプ＝トークンの両義性をもっている。

命題記号(propositional sign〔Satzzeichen 文記号〕)は文(sentence〔Satz〕)である――ただし、このように述べるところを見定めなくてはならない。というのも「文」とは、何か当の文を成す諸語と同じ本性のもののことであろうからで

ある。だが、命題記号は一箇もしくは一群の対象ならず一箇の事実であるゆえに、単一の語とは本質的に異なっている――「文〔命題〕記号の要素すなわち語が文記号のなかで相互に一定の仕方で関り合うところに、文記号は存立する」(三・一四)。こうして「命題記号」はタイプ＝トークンの両義性をもつ。すなわち(およそ記号なるトークンとして)命題記号なるトークンは有形の相似性によって(また何らかの音を何らかの形と連想させる約定によって)まさしく単語の例と同様あれこれのタイプに纏められる。ところが、「命題」とはタイプであって、これの事例は、何らかの外形ならぬ何らかの意味(sense)を共有する一切の命題記号から成る、というタイプのことなのである。

命題と思考との関係についてヴィトゲンシュタイン氏はかなり曖昧である。だが私の思うに氏の言いたいところは、思考とはタイプであって、これのトークンはいずれも何らかの意味を共有、また対応する命題なるトークンを含むが、諸他の非言語的トークンをも含むタイプ、ということにある。ただし、この非言語的トークンと言語的トークンとの差異は重要でないゆえ、言語的トークンを考察するだけで十分である。「だが「Aはpと信じる」「Aはpと考える」「Aはpと語る」は明かに、'pはpと語る'という形式のものである」(五・五四二)とヴィトゲンシュタイン氏は語り、判断の分析についてラッセル氏がさまざまな機会に相異なる答を返してきた問題を、明快に「一箇の命題なるトークンが何らかの意味をもつとは何か」の問題に還元する。私にとって、この還元は重大な前進であると思われる。しかもこの還元が導く問題は根本的に重要なものであるゆえに、ヴィトゲンシュタイン氏が当の問題に答えつつ語ることを、入念に検討したいと思う。

まず、当の問題に回答を出せるならば、附随して真理の問題の解決が成る、いやむしろ、かかる問題の存在しないことはすでに明白である、と述べてよいことになろう。というのも、'pはpと語る'のであれば、一箇の思考もしくは命題なるトークン'p'は、pならば真、～pならば偽と呼ばれるからである。何かの意味が実在と合致するならば当の何

かは真である、何かの表す可能的事況が事実的事況であるならば当の何かは真である、などと言えるが、しかしこれら定式的言明はただ上記の定義を別の言葉で語っているにすぎない。

ヴィトゲンシュタイン氏によれば、命題なるトークンは論理的図像である。それゆえ、このトークンの意味は図像の意味の定義によって与えられるはずである。したがって命題の意味とは、命題の要素（語）の指す事物が、要素自体が相互に関り合うのと同じ仕方で、言いかえれば論理的に、相互に関り合っている、ということになる。だが最小限しか言わないにしても、この定義がきわめて不完全であることは明白である。この定義を文字通りに適用できるのはただ一つの事例、完全に分析された要素命題の事例しかないのである。（要素命題とは事態の存立を主張する命題のこと、また命題なるトークンに、これの意味内に生起する対象それぞれと対応する要素が存在するならば、当の命題なるトークンは完全に分析されている、と説明してよろしかろう）。こうして‘a’がaを指し、‘b’がbを指し、‘R’が、いや一層精確には、‘aRb’と書いて‘a’と‘b’とのあいだにわれわれの確立する関係がRを指すのであれば、そのとき、‘a’は‘b’に対してこの関係にある、とは他ならず、このことはaRbであって、このaRbが当のこと〔‘aRb’〕の意味なり、ということである。しかしながら、仮に例えば「bに対するRをもつこと（having R to b）」に一単語が宛てられて命題が完全には分析されなくなるとすれば、あるいはまた、名辞のようには対象を表さぬ“not”や“if”のごとき論理的常項を含み、一層複雑になった命題を相手にしなければならないとすれば、右の単純な図式の変更は必至のことである。これら難点のいずれにもヴィトゲンシュタイン氏がどのように対応するつもりか、氏は少しも明かにしていない。第一の難点については、氏はこれをほとんど無視しているのであるが、これの起因するところは途方もなく錯綜する日常言語にあり、この錯綜をア・プリオリに解くことはできない、と氏は道理に適う弁明を行うでもあろう。というのも完璧なる言語では命題はすべて完全に分析されるであろうからであり、例外は、一記号を定義して、これの位置は単純記号

群の記号列内にあり、とするばあいであるが、このばあいにはヴィトゲンシュタイン氏の言うように、当の定義された記号の指す意義は、この記号の定義を決めたさいの記号群次第（via）ということになろう。だが第二の難点には立向わなくてはならない。要素命題しか扱わぬ理論で満足することはできないからである。

全般的に命題の意味は要素命題に照して説明されている。n箇の要素命題については、これらの真偽に2^n箇の可能性があり、この可能性が要素命題の真理可能性と呼ばれる。同様、対応する事態の存立・非存立にも2^n箇の可能性がある。ヴィトゲンシュタイン氏によれば、いかなる命題も何らかの要素命題の真理可能性との一致・不一致の表現であり、命題の意味とは、対応する事態の存立・非存立の可能性が当の命題と一致するか否かという、命題の一致・不一致のことである（四・四、四・二）。

このことは真理函数を示す記号表で説明されている。Tとは真を、Fとは偽を表し、二箇の要素命題〔pとq〕についてはつぎの四つの可能性が示される——

p	T	F	T	F
q	T	T	F	F

さて、一致の可能性にはTを置き、不一致の可能性には空欄のままとすることで、例えばp∪qをつぎのように表せる——

p	T	F	T	F
q	T	T	F	F
	T	T		T

あるいは、可能性を示す旧来の式を採れば（TT－T）（p, q）となる。右の表記法は明かに、pとqが要素命題で

あることを何ら求めていないし、拡大して運用すれば、紛れもない変項のある命題を含むこともできる。こうしてpとqには、枚挙によってでなく、一命題函数のあらゆる値として、ということは（「文〔命題〕の部分にして文の意味を特徴づける各部分それぞれ」（三・三一）と定義される）何らかの表出を含む一切の命題が与えられるとしてよかろう。そして、単独のTが表すのは独立変項一切が偽なる可能性との一致だけ、ξはfxの値の集合のこと、というばあい、（¬¬T）（ξ）とは普通には～∴（∃x）.fxと表記されている事柄のことである。このように命題はいずれも要素命題の真理函数であり、多数あれこれ別様な構文の命題記号はみな同じ命題なのである。というのも、同じ真理可能性との一致・不一致を表すゆえに右の多数の命題記号は同じ意味をもつからであり、要素命題の同じ真理函数だからである。こうしてつぎのようになる——

q∪p：～q∪p および ～（～p∪～p）はpと等しい。

これが導く先は推論についての簡明この上ない理論である——すなわち命題と一致する真理可能性を当の命題の真理根拠（truth-ground）と呼ぶと、もしpの真理根拠がqの真理根拠に含まれるならば、pからqが帰結する、という理論である。この例についてヴィトゲンシュタイン氏はまた、qの意味はpの意味に含まれているし、pを主張すれば附随的にqをも主張することになる、とも言う。私の思うに、この言明は実際のところ意味について「含む（contain）」ということの定義であり、日常言語を部分的に重んじて「主張する（assert）」の語義を拡張したものであるが、多分これは、p.qならばp、あるいは（x）.fxならばfaについては当るけれども諸他の例には当らない。

重要度の大きい極端例が二つある——すなわち、あらゆる真理可能性との不一致を表せば矛盾（contradiction）が成り、あらゆる真理可能性との一致を表せば、何ひとつ語ることのない同語反復（tautology）が成る。論理学の命題は

同語反復命題である――このことを、つまり論理学の命題の本質的性格を明瞭にさせたこと、これは目ざましい偉業である。

さてわれわれは、一箇の命題なるトークンが何らかの意味をもつとは何かについて、上述のことが適切な説明になっているか否かを考察しなければならない――私には、適切な説明になっていないことは確かと思われるのである。実際には、いかなる意味があるかの説明でしかなく、いかなる命題記号がいかなる意味をもつかは説明していないからである。上述の説明は「'p'はpと語る」に代えて「'p'はこれこれの真理可能性との一致、これこれの真理可能性との不一致を表明」とすることを許してくれる。しかしこの定式化を「'p'はpと語る」の究極的分析と見做すことはできないし、それでは更なる分析がどのように進むのかは全く不明である。したがって当面の疑問に答えるためには他所を探らなくてはならない。この回答へ向けてヴィトゲンシュタイン氏ははっきりと貢献していて、五・五四二において、「'p'はpと語る」には事実の対象間の対応を介しての事実間の対応がある、と語っている。だがこの説明は不完全である。意味は意味内に生起する対象によるだけでは完全には決定されないからである。また命題記号も命題記号内に生起する名辞によるだけでは完全には決定されないが、それというのも命題記号には、対象と対応せず、しかも曖昧に残されたままの仕方で意味の決定を完成させる、論理的常項も存在するからである。

たんに論理的記号運用(シンボリズム)しか扱わなくてよいのであれば、私は、ここに何か難点があろうとは思わない。というのも、さまざま附けられる名称は別として、当の記号運用(シンボリズム)内で意味の確かな命題記号の一切を作れる規則は存在するであろうし、このような規則を記号運用(シンボリズム)に加えることで、われわれには、およそ「意味」なるものの定義を完成することができようからである。こうして、『数学原理』の記号運用(シンボリズム)が相手ならば、「'p'が語るのは～aRbである」の分析は以下のごとくなろう――aを指すものは何でも'a'、云々、'a'R'b'は'q'と呼ぶならば、'p'は'～q'であり、'～～～

q"であり、"～q ∨ ～q"であり、これら以外でも、明確な規則のもとに立てられる記号ならば何としてもよい。(この規則を定式化することは、記号論理の全体を仮定することと思われるゆえ、一体可能かと疑ってよいことは言うまでもない。けれども完璧な表記法においてならば定式化は可能としてよろしかろう。例えば「T」「F」を並べるヴィトゲンシュタイン氏の表記法に難点はなかろう)。だが明かに、これだけでは十分でない。これが与えるのは「Aはpと主張する」の分析でなく、「Aはこれこれの論理表記法使用のpと主張する」の分析にすぎないであろう。だが、中国人が自分の使う表記法など考えていなくとも確かに意見をもっていること、これは誰でもよく承知であろう。また同様、言われてみれば重要なこと明白ながら、notにあたるドイツ語の"nicht"の用法が、ドイツ人のあいだでは、'believe (信じる)''think (考える)'のごとき語の一部になる、ということもよく承知であろう。〔Peter soll die Absicht haben, umzusatteln.——Nicht, daß ich wüßte.「知りませんね」—訳者〕

この難点からの出口を見つけるのはきわめて難しい。出口のひとつは恐らく、「精神の分析 (The Analysis of Mind. 1921. p. 250)」の、選言および含意には特殊な信念感情 (special belief feelings) が生起しているのであろう、というラッセル氏の示唆に見出せるとしてよかろう。とすれば論理的常項は当の感情の代理として意義深いものであろうし、人間の思考の普遍的な論理的記号運用(シンボリズム)の基底を形づくることであろう。ところが、これとは別種の解決を信じてヴィトゲンシュタイン氏は、図像の意味とは、図像の要素が相互に結ばれているのと同様に対象が相互に結ばれていること、という初めの方の言明へ戻ってゆくかと思われる。これを当面の文脈内で自然に解釈すれば、aはbと何らかの関係をもってはいないと表せるのは、ただ、'a'に'b'と何らかの関係をもたせないことによってでしかない、ということであり、一般的には、否定的事実にしか否定的事実を主張することはできず、含意的事実にしか含意的事実を主張することはできず、以下同様ということである。これは変であり、明かに氏の指していることではない。だがそ

れでも、命題なるトークンがこのトークンの意味と相似るのはとにかくこの種の仕方においてである、とヴィトゲンシュタイン氏は考えているように思われるし、こうして五・五一二の言となる――〔〉~p〈において否定を行っているのは〉~〈でなく、この表記の記号で、pを否定する記号すべてに共通する何ものかである。すなわち〉~p〈とか〉~~~p〈とか〉~p〈~p〈とか〉~p.~p〈等々（以下無限）を作るさいの共通規則のことである。そしてこの共通なるものが否定を反映するのである」。これがいかなる仕方で否定を反映するのか、私には理解できない。二命題の連言が両命題の意味の連接を反映する単純な仕方で行われるのでないことは確かである。連言と他の真理函数とのこのような相違は、pおよびqを信じるとは、pを信じqを信じることだが、pもしくはqを信じるとは、pを信じる、もしくはqを信じると同じことでなく、また、非pを信じるとは、pを信じないと同じことでない、という事実に見ることができる。

さて今度はヴィトゲンシュタイン氏の理論のなかで最も興味深いもののひとつへ向わなくてはならない――何か語ることはできず示されるだけのものがあり、これらが神秘的なるもの（the Mystical）を成す、という理論のことである。これらをなぜ語ることはできないかの理由は、これらも始末をつけなければならないのが、命題が現実と共有する論理的形式だからである。これらがいかなる種類のものかの説明は四・一二二にある――「対象および事態の形式的性質について、あるいは事実の構造の性質について、われわれは何らかの意味において話題にすることができるし、また形式的関係や構造のもつ関係について同じく何らかの意味において話題にすることができる。（構造の性質に代えて「内的性質」、構造のもつ関係に代えて「内的関係」とも私は言う。これらの語を私が導入するのは、哲学者のあいだで広く行きわたっている混同すなわち内的関係と本来的（外的）関係との混同の根拠を示したいためである）。このような内的性質および内的関係の存立することは、文（＝命題）を介してでは主張できない。当の事態を呈

示して当の対象を扱う文中におのずと示されるのである」。さきに述べたが、論理的形式の本性は、このような結論は良いとさせる論議を差出せるほど、十分に明白ではない、と私には思われる。そして、これより良い内的性質の扱い方を教えるのは、つぎの規準であろうと考えている――「性質が内的であるのは、当の性質を対象がもたぬことは考えられぬばあいである」(四・一二三)。

真の命題はいずれも何か可能的ながら必然的ならぬことを主張する、とはヴィトゲンシュタイン氏発見の原理であって、仮に正しいとすれば、これはまことに重要な発見である。これが帰結する出発点は、命題について、命題は独立要素命題の真理可能性との一致・不一致を表すものであり、したがって唯一の必然性は同語反復命題の必然性、唯一の不可能性は矛盾命題の不可能性である、という氏の説明である。この説明を貫くには大きな難点がある。ヴィトゲンシュタイン氏の認めるところ視野の一点が赤でもあれば青でもあることはできない〔不可能〕けれども、驚くことに他方では、氏は推論には論理的根拠がないと考えているゆえ、われわれには、赤くも青くもある一点に視覚が出合うことなしと考えてよい理由はなかろうからである。とにかく右のようにして、「これは赤くも青くもある」は矛盾命題なりと氏は言う。ここに暗示されているのは、(これらの語でわれわれは絶対的に特殊な色合を指すと仮定すれば)赤や青など外見は単純と見える概念が実は複雑であり、形式的に両立しがたい、ということである。どのようにしてこうなるのかを示そうと努めて、これらの概念を氏は「よろめき (vibrations, schwankender Gebrauch)」の語を用いて分析している(四・一二三)。だが、仮に物理学者ならば「赤」でわれわれの指すものの分析をこのようにして提供するとしてさえも、ヴィトゲンシュタイン氏はただ、当の難点を空間の、時間の、物質ないし霊気(エーテル)の必然的性質の難点に帰着させるだけでしかない(六・三七五一)。明かに氏は当の難点を、一粒子が同時に二場所に在ることの不可能性による、としている。空間・時間のもつこうした必然的性質には、右のごとく帰着させる種類の還

元をさらに先へ進めることがほとんどできない。例えば私の経験に照して時間における「あいだ」を考えてみると、もしBがAとDのあいだにあり、CがBとDのあいだにあれば、CはAとDのあいだになければならない――けれども、これが形式上は同語反復命題、とはどのようにして起りうるのか、理解しがたいのである。

だが目には必然的と見える真理のすべてが同語反復、と想定することはできない、いやヴィトゲンシュタイン氏によって想定されているわけではない。また当の真理の対象がもたぬとは考えられない内的性質も存在する〔四・一二二以下〕。見たところ対象のこのような性質を主張していると見える文は、ヴィトゲンシュタイン氏によって、無意味(ナンセンス)である、しかし何か言表することのできないものと何らかの曖昧な関係に立っている、と考えられている。当の文は無意味(ナンセンス)である、すなわち当の文が主張するとされているものを主張することはできない、と氏が考える理由のなかには、右の何か言表することのできないものが伏在すると思われる。けれども私には、これらの文がなぜ無意味(ナンセンス)かの理由を挙げ、これらの文の起源と外見的意義について、何ら神秘的な含みのない起源と意義を全般的に説くことができると思われる。

この種、われわれが「擬似命題 (pseudo-proposition)」と呼ぶ文章の現れ方は、われわれの言語如何によってさまざまである。出所のひとつは、これらの語は日常の普通名詞のようには命題函数と対応しないのに、「対象 (object もの)」「事物 (thing もの)」のごとき名辞を用いなくてはならないという、文法的必然性にある。例えば'This is a red object. (これは赤いものである)'から擬似命題'This is an object. (これはもの〔対象〕である)'が出てくると思われるが、このことは『数学原理』の記号運用(シンボリズム)内では留めることが全然できなかった。だが最も普通で最重要の出所は、記述に代えた名辞や相関名辞の代用ということにある。(私は「相関名辞 (relative name)」の語を用いてここに'p'を含ませるが、'p'とは何らかの意味pを表す表現 (expression) のことであり、この語使用は、当の意味、例えば'what I said. (私の語った

こと)'のごとき意味を述べる記述 (description) と対照させてのことである)。通常これは合法 (legitimate) と認められる。命題式 (propositional schema) に空白のあるとき、この空白を記述が埋めて成る命題式の意義が前提とするのは、一般に、当の記述にあたる事物〔もの〕の名が空白を埋めて成る命題式の意義だからである。例えば命題'The φ is red. (φは赤い)'を分析すれば「φであるものが一つ、しかも一つだけであって、それ〔この一つのもの〕は赤い (it is red)」となる。この分析において'it is red'の生起が示している事柄は、最初の命題の意義は、φのタイプに入るaなる「aは赤い (a is red)」の意義を前提にしているということである。だが時折この分析が当らないのは、記述を含む命題はやや別様に分析しなければならないからである。例えば命題'The φ exists. (φは存在する)'は「φであるものが一つ、しかも一つだけあって、それ〔この一つのもの〕は存在する」でなく、たんに「φであるものが一つ、しかも一つだけである」であり、したがって当の命題の意義は「aは存在する (a exists)」の意義を前提にしない。前提にするなどとは無意味(ナンセンス)である。というのも、当の命題の真偽は、真正の命題には決してないことだが、現実と対照させずとも検分するだけで見抜くことができようからである。だが、一部は「aは存在する (a exists)」と「'a'の指すものは存在する (the objects meant by 'a' exists)」との区別にしばしば失敗することから、また一部は、空白を記述が埋めるや「——は存在する (——exists)」はつねに有意義であるし、しかも記述と名辞の相違にわれわれは十分には敏感でないことから、「aは存在する」は時折あたかも有意義であるかのごとく感じられる。この人を惑わせる感じにヴィトゲンシュタイン氏は屈伏して、ついに以下のごとく思うまでにいたっている——名辞'a'の存在はaが存在することを示しているが、このことの主張はできない、しかしながら、このことこそ神秘的なるものを成す核心であると思われる、すなわち「いかに世界があるかは神秘的なことでなく、神秘的なこととは、世界があることそのことである」(六・四四)。

つぎの例は同一性が提供するが、この同一性についてヴィトゲンシュタイン氏は重要な破壊的批評を加えている――「ラッセルの〉＝〈の定義は十分でない。この定義に従うと、二つの対象があらゆる性質を共有する、とは語ることができないからである。（右の命題は、たとい正しくはないとしても、やはり意味は具えている）」（五・五三〇二）。確かに‘a＝b’は擬似命題であるに違いない。‘a’と‘b’が同じものの名か、異なるものの名かによって、‘a＝b’はア・プリオリに真か偽だからである。さて、一命題における二つの異なる記号は相異なる意義をもたなければならぬ、という新たな約定を設けるならば、同一性を含まぬ記述について新たな分析を得ることになる。

$f(\iota x)(\phi x)$ については、

$$(\exists c) : \phi x \supset_x x = c . fc$$ に代って、

$$(\exists x) . \phi x . fx : \sim(\exists x, y) . \phi x . \phi y$$ となる。

そして $(\iota x)(\phi x) = c$ は $\phi c : \sim(\exists x, y) . \phi x . \phi y$ と分析されるからには、‘＝＝’が有意義であるのは、空白の少くとも一方を記述が充たすばあいでしかないことが解る。ついでながら、この同一性の拒斥は集合・集合数（cardinal number）の理論に深刻な影響をもたらすかもしれない。例えば、一方の領域（domain）と他方の領域とに一対一の対応関係があるとき二つの集合は同数から成る集合でしかない（only）、と語ることは、当の関係を同一性によって築けないのであれば、ほとんど認めがたくなろう。

つづいてこの説明が、命題の意味の内的性質に、また命題が真の命題であるならば対応する事実に、どのようにして適用できるのかを示してみたい。‘p is about a.（pはaについてのことである）’が例である。この命題の意義は命題‘He said something about a.（かれはaについて何か言った）’の意義から出てくると思われるかもしれない。だが命題の後者の分析を熟考すると、そうではないと解るであろう。後者を直せば明かに「かれの主張したpにして、aについ

てのことであるpがある」でなく、「かれがφaと主張した類の函数φがある」となり、これは擬似命題‘p is about a.’を含んでいないからである。同様に命題‘p is contradictory to q.（pはqと矛盾する）’は‘He contradicted me.（かれは私と矛盾した）’に含まれていると思われるかもしれない。だが後者を「私はp、かれは~pと主張した類のpがある」と分析すれば、前者は擬似命題であると解る。もとよりこれは完全な分析ではなく最初の一歩にすぎないが、当面の問題にとっては十分であって、‘— is contrary to —（—が—と矛盾する）’が有意義であるのは空白の少くとも一方を記述が充たすばあいでしかないが、どのようにしてこうなるのかを示してくれる。

他には数学の命題が擬似命題であるが、これは、ヴィトゲンシュタイン氏によれば、相互に代替可能な二命題のあいだに‘＝’を書くことによって得られる同等関係のことである。どのようにして、この説明で数学全体を覆うと考えることができるのか、私には解らない。解明のさらに難しい不等関係もあるからには、右の説明は明かに不完全である。けれども命題‘I have more than two fingers.（私は二本以上の指をもつ）’が‘10 > 2’の意義を前提としないことは容易に観取できる。というのも、異なる記号は相異なる意義をもたなければならぬことを思出せば、右の命題はたんに、‘(∃x, y, z) : x, y, z are fingers of mine.（—は私の指である）’にすぎないからである。

同語反復のごとく一見必然的と見える真理が色の分野で困難に出合ったのと全く同様、剰余（remainder）を擬似命題とする解明も色の分野で困難に出合う。「この青色とあの青色と言えば、おのずから一方が明るく他方が暗いという内的関係にある。これら両対象がこの関係にないなどとは到底考えられない」（四・一二三）とヴィトゲンシュタイン氏は言う。したがって、名づけた一色は同名の他色より明るい、と主張するかに見える文は擬似命題としなければならない。だがこのことを、どのようにすれば、「家の私のクッションは私のカーペットより明るい」のごとく、いま述べた色はもうひとつの色より明るいと主張する文の、疑う余地なき意義と調停させることができるのか、理解に

苦しむのである。ただしこの例ならば、現に物理学者は「赤」の指すものを分析していると想定することで、困難を完全に排除できるかもしれない。というのも、結局この色分析の行きつくところは周波数の波長などの数となり、困難といっても、〔分析によって〕与えられた二数間の不等は無意義とすることと、述べられた二数間の不等は意義ありとすることとを調停する困難に還元されるし、さきに「私は二本以上の指をもつ」について示唆した線上において、この調停がとにかく可能であることは明白だからである。

さて今度はヴィトゲンシュタイン氏による哲学の説明に移ってみよう。「哲学の目的は思考の論理的浄化である。哲学は教説でなく活動である。哲学的著作は本質的に解明から成る。哲学の成果は「諸々の哲学的命題」でない――諸命題が明晰になることである。哲学の行うべきことは、哲学がなければいわば曖昧模糊たる思考を明晰ならしめ、思考の輪郭を明晰ならしむることである」(四・一一二) とヴィトゲンシュタイン氏は言う。私には、この「明晰〔clarity < clear; klar〕」をこれ以上に解き明してくれるのでなければ、この説明でわれわれが満足することはできないと思われるし、それゆえここで私はヴィトゲンシュタイン氏の体系と調和する解明の提示を試みたい。私の思うに、昔かれた一箇の文章は、文の意味の内的性質と相関する可視的性質 (*visible* property)、すなわち、この文の意味の内的性質を「見せてくれる (show)」可視的性質をもつかぎりにおいて、「明晰」である。ヴィトゲンシュタイン氏によれば、文の意味の内的性質はつねに命題の内的性質のうちにおのずと示される――だがこのことが何を指しているかは、「命題」にはタイプ＝トークンの曖昧さがあるために、直ちに明白とはならない。一命題の性質とは当の命題のあらゆるトークンの性質を指していなければならない、と私は思う。ところが一命題の内的性質とは、トークンの性質ながら、いわばトークンならぬタイプにとって内的である性質のことであり、言いかえれば、トークンの一つがまさしく当のタイプのトークンであるはずならば当然もっていなければならない性質であって、何らかの都合でもって

いないなどとは考えられない、という程度の〔消極的〕性質ではない。われわれは、文にとって、文が現にもっている意味をもつ必然性はないことを銘記しなければならない。したがって、文がfaと語るとき、この文のなかに何らかの仕方でaと結ばれているものがある、ということは当の文の内的性質ではない。このことは命題の内的性質なのであって、それというのも、他の在り方では当の文が当の命題タイプに属することができない、言いかえれば、当の意味をもつことができないであろうからである。こうして、命題の内的性質にして命題の意味の内的性質を示す内的性質とは、総じて目に見える可視的性質でなく、意義指示（meaning）なる観念を含んでいる複雑な性質であることが解る。だが、各事物がそれぞれ自身の名は一つしかもたぬ完璧な言語においては、文の意味のなかに何らかの対象が生起ということも、当の文中に当の対象の名が生起することによって、目に見えるように示されるであろう。そしてこれは、意味の内的性質すべてについて起ることと考えておいてよかろう。例えば、一つの意味が別の意味に含まれていること（すなわち一命題が他命題から帰結すること）は、意味の内的性質を表明している文中に、つねに可視的に現れるとしてよかろう。（ヴィトゲンシュタイン氏の真偽表記法によってほぼ達成されていることである）。こうして完璧な言語においては、一切の文ないし思考は完璧に明晰となろう。「明晰」を一般的に定義するためには「文の可視的性質」に代えて「命題記号（サイン）の内的性質」としなければならないが、これをわれわれは「命題の内的性質」と類比的に扱って、仮にトークンとはこれが書き記されるや可視的性質に等しい記号（サイン）たるべきものとすれば、およそトークンのもたなければならない性質のことであると解釈するのである。そしてわれわれは、命題記号の意味の内的性質がたんに命題の内的性質によってばかりでなく命題記号の内的性質によっても示されるかぎりにおいて、この命題記号は明晰であるという。

（総じてヴィトゲンシュタイン氏の教説は完璧な言語についてしか主張できない、という見解が生じるのは、恐ら

く、命題の内的性質と命題記号(サイン)との混同によることであろう)。

内的性質について上来述べてきた非＝神秘的説明の問題によって、ここでの哲学観はたやすく解釈できる。まずわれわれは、「何かが内的性質をもつ」とは擬似命題、それゆえこれを認識することはできないのに、しばしばあからさまにこれを認識したり、しなかったりするという事実を捉えて説明しよう。このとき実際にわれわれが認識するのは「目の前の言葉によって指示され主張されている対象ないし意味はこの性質をもつ」ということであり、この命題には意義ありとされるのは、すでにわれわれが記述を名辞の代用にしてしまっているからである。こうして論理的証明の挙句われわれは、pが擬似命題たる同語反復命題でないことをでなく、'p'は何も語っていないということを認識する。命題を明晰にするとは、命題の論理的性質が文の可視的性質と連想されるような言語で当の論理的性質を表すことによって、命題の論理的性質の認識を容易にさせることである。

だがこの活動は、私の思うに、例えば知覚や思考の事実を表す文など興味深い文集団の意味の論理的形式について何か新たなことを発見するときにはいつでも、哲学的命題に落着くことであろう。われわれは「pはこれこれの形式の命題である」は無意味(ナンセンス)としてヴィトゲンシュタイン氏に同意しなければならない。けれども「'p'はこれこれの形式の意味をもつ」は無意味(ナンセンス)とは言えないであろう。これが無意味(ナンセンス)であるか否かは命題「'p'は有意義である」の分析如何によることで、私には、多分これは選言命題であって、選択肢の一部は'p'の意味のさまざまな可能的形式から生じているものと思われる。とすれば、これら選択肢の幾つかを排除することで、'p'の意味の形式についての命題をつくることができる。そして'p'が「かれはqと考える」とか「かれはaと見る」のごとき事例では、「'p'は有意義である」の命題は、これを哲学的命題と呼んで何ら差支なかろう。また、ヴィトゲンシュタイン氏の比較的穏やかな以下の主張とも決して相容れないことはなかろう――「哲学的な事柄について書かれてきた大方の命題や疑問は、偽ではな

く、無意味なのである。それゆえわれわれは、この種の疑問にはおよそ答えることができず、疑問の無意味性を確認することしかできない。哲学者の大方の疑問や命題は、われわれが自身の言語の論理を解さないことに起因している」(四・〇〇三)。

最後に、世界を見るヴィトゲンシュタイン氏の全般的な見方に触れておきたい。「世界は事実の総体であって、事物の総体でない」(一・一)し、「明かなことだが、現実世界からどれほど異なる世界として思考された世界にしても、何かを——形式を——現実世界と共有しなければならない。この確固たる形式はまさしく諸々の対象から成っている」(二・〇二二、二・〇二三)と氏は言う。いかなる仮想世界も現実世界の対象すべてを含んでいなければならない、という見方は普通でないが、この見方は氏の諸原理からの帰結であると思われる。というのも命題「aは存在する」が無意味(ナンセンス)となると、aは存在しないと想定することはできず、想定できるのはただ、aは何らかの性質をもっているか、いないか、ということだけになるからである。

本書の序文においてラッセル氏は以下の事実に際立った難点を見出している——すなわち、$(x).\varphi x$はφxの値の総体を含み、したがって一見xの値の総体をも含むと思われるが、このxの値の総体が、ヴィトゲンシュタイン氏によれば、語ることのできないものである、という事実のことであり、なぜできないかといえば、「全体としての世界について何かを語ることは不可能であり、かつ、およそ語りうることは何であれ、世界の画定された部分についてでなければならない」〔ラッセルの文〕とはヴィトゲンシュタイン氏の根本提題の一つだからである。しかしながら、これがヴィトゲンシュタイン氏の見解を公正に表しているか否かは疑わしいと思われる。ひとつには、「あらゆるSはpである(All S's are P)」は非S(non-S's)については多分何ごとも主張していないとみるのでなければ、$(x).\varphi x$と語るのは不可能、とするのがラッセルの提案だが、このようなことをヴィトゲンシュタイン氏が支持しないことは確かだ

からである。それゆえヴィトゲンシュタイン氏が語っていて、ラッセル氏の解釈に尤もらしさを与える事柄を考察するのは興味深いであろう。疑いなくヴィトゲンシュタイン氏は、全対象の総数について云々できる可能性を否定する(四・一二七二)。だが理由は、全対象が非合法的総体の形式となるからでなく、「対象」とは、函数によってでなく変項xによって表される擬似概念だからである。(ついでながら私には、なぜ全対象の総数を、何か特殊な性質をもつ事物の数と、当の性質をもたぬ事物の数との合計として定義してはいけないのか、その理由が解らない)。こうしてヴィトゲンシュタイン氏は語る――「画定された全体として世界を感じる感情が神秘的という感情である」(六・四五)。だが私は、ここから、ラッセル氏に従って、xの値の総体が神秘的であるのは、もしかすると、ただ「世界は事実の総体であって事物の総体ではない」(一・一)からこそである、と推断できるとは思わない。そして私は「画定された(limited, begrenzt)」の語が右に引いた一文の鍵になると思う。神秘的感情とは、世界はすべてでないという感情、世界の外に何かある、世界の「意味(sense)」もしくは「意義(meaning)」があるという感情のことである。

これまで私の論じてきた話題で本書の興味はほぼ尽きる、などとは決して考えてならない。ヴィトゲンシュタイン氏は他にも、例えばタイプ理論、先祖伝来関係、蓋然性、物理学の哲学、倫理学など多くの主題について、つねに興味深い評語、ときには肺腑を抉るほどの評語を下しているのである。